

する。それをつないで、自分の目標が達成できるようにプロデュースしていくことは、時に容易ではない。

留学の効果とは、長い目でみなければ分からないものもある。学位を取りに行ったけれど果たせなかった友人は、いまは学位でなく「経験」を生かした仕事をしている。この場合、無駄はあったのか、なかったのか。帰って不遇の境遇にいる友人は、アメリカに戻ろうとしている。日本に張りつく必要はないし、

世界中を自分の人生の場の対象として生きていけばいい。しかし外国人として異国で生きることには、それなりの困難がある。この場合、留学で得をしたのか、損をしたのか。

つまりは、留学経験を生かして行こう、という姿勢の問題なのかもしれない。何にしても、戦略、体力、幸運は必要なことである。「成功する留学」をめざして、がんばってほしいと心から思う。

留学の心構え

広大生と海外留学

——留学のすすめ——

総合科学部 山本 雅

私は、広島大学に勤務してすでに20年近くになるが、一般的印象としては、海外留学ということに関しては、広大生は非常に消極的である。この消極性は一体どこにその原因があるのであろうか。自分は卒業してサラリーマンになればそれで十分だと思っているのであろうか。それとも、金銭的な理由があって、留学などする余裕は自分にはないと思っているのであろうか。それとも語学力が自分にはなく、とうてい留学などできないと思っているのであろうか。あるいは、公費留学には試験があり、自分はそれにとうていパスするはずはないと思ってはじめてからあきらめているのであろうか。

私が大学生だったころ（昭和37～41年）は、海外留学をはばむ最大の理由は金銭的なことであった。あのころは1ドル360円の時代であり、学生が1日8時間アルバイトして500円（1日が、である）の時代であった。だから外国の大学で自費で学ぶことは、大多数の者にとっては極めて困難であった。また、公費留学の制度は限られており、競争は激烈で

あった。しかし、最近では1ドル140円となり、また一般のサラリーマンの月給が欧米のそれに匹敵し、あるいはそれ以上になっているので、東京の私立大学に息子や娘を通わすよりも、アメリカの大学に留学させるほうが安あがりの時代になってきた。また、公費留学の制度も非常に増え、どの広大生でも意欲さえあれば簡単に応募でき、留学できるようになってきた。今回の「広大フォーラム」の特集にはどのような公費留学制度があるか、その一覧表が掲載されるからそれを読んでほしい。

このごろでは、広島大学の学生は、それぞれに意欲さえあれば、自費であれ、公費であれ、自分の必要性や希望に応じて手軽に留学できる時代になったのである。これは、昔、留学の機会を探し求めなければならなかった私に言わせるとまったくうらやましいかぎりである。広大生は意欲を持って、海外留学を真剣に考え、毎年、それこそ何十人、何百人の学生が続々と海外に進出してほしいと思う。留学すれば、確かに卒業年は先へ伸びる。し

かし、卒業が1年や2年先へ伸びたからと言ってそれがどうしたというのであろうか。海外での経験や見聞はそれを補って余りある価値を持つものである。

留学において大切なことは、相手国（アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス等）において何を勉強したいか、何を調べたいのか、おおまかな計画を持っておかなければならないということである。これがない場合には留学は単なる物見遊山になってしまう。私は総合科学部の外国語コースに所属しているため、文部省の海外学生派遣制度の学内面接委員をよく頼まれる。面接において、応募者に「なぜ留学したいのですか」と尋ねる（もちろん英語で）と、決まって帰ってくる答えは「英会話を勉強したいのです」とか、「向こうの文化を勉強したいのです」である。それで私は、「それは、日本では出来ないことですか」と尋ねると、応募者はしどろもどろになってしまう。

私は、「英会話をやりたい」、「向こうの文化を学びたい」という海外留学もあっていいと思う。しかし、これはあくまで「私費」でやるべきものであって、「公費」という国民の血税を使ってやるべきことではない。「なぜ留学したいのか」に対しては、「ミシガン大学においては〇〇教授が、このような英語教育の実験をしており、それを調査したい」とか「チュービンゲン大学においては、偏微分幾何学のこのようなスタッフや資料がそろっているから、その教授の指導を受けたい」とかの具体的な計画が必要である。

すると、多くの広大生はこういうであろう。「どの大学にどの教授がいて、どのような研究やプロジェクトが行われているという情報はどのようにして得るのか」。現代社会はまさに情報の時代である。このような時にこそ、広大の指導教官を利用してほしい。広大のほとんどの指導教官は海外留学経験者だし、学問の世界の動向に関して幅広い知識を持っている。だから、指導教官に留学の希望を打ち明けて、情報を得るとよい。中には相手国の

知り合いの教授にわざわざ紹介の手紙を書いてくれる指導教官もいるであろう。

私自身、過去に、ハワイ大学、コロンビア大学、ブラウン大学、ハーバード大学にて通算4年留学している。私の専門分野は、アメリカ文化・文学であり、これらの分野の研究において海外留学を志す広大生には種々の情報を提供するから、遠慮なく私を利用してほしい。つい先日、「私はアメリカの夏期講座に参加したいのだが……」という相談があった。また、その前は、「卒業したら、私学経営について勉強したいのだが……」という相談があった。また、変わったものでは、「病院の宣伝広告は日本では行われていないが、アメリカではどの大学でそのようなことを教えているだろうか」というような質問があった。これらの質問に対して、私は東京の赤坂にある「フルブライト委員会」に問い合わせ、できるだけ正確な情報を提供するようにしている。

「アメリカで英会話を勉強したい」「向こうの文化を勉強したい」という意図での海外渡航を私は「遊学」と読んでいる。向こうで本格的に何かを研究し、授業に正規に参加し、学士号、修士号、あるいは博士号の取得をめざすのを私は「留学」と読んでいる。今まで日本人の「留学」の多くは、よく話を聞いてみると本当は「遊学」である。学者・研究者の中で海外渡航した者でも、そのほとんどは「遊学」であって、「留学」ではない。人にはそれぞれ海外渡航の目的や用途があろうから、いちがいに「遊学」が悪くて、「留学」がいいとは言えない。しかし、これからの若い学生諸君は、映画スターやタレントが金にまかせて「遊学」するのをまねするのではなく、しっかりした意図・研究計画を持って実り豊かな留学をすることが大切である。「遊学」は、ともすると物見遊山になるのである。最近、利根川進氏・立花隆氏の書いた『精神と物質』（文藝春秋社刊行）という本を読んだ。利根川氏は1987年度のノーベル生理学・医学賞を受賞した人であり、現在マサ

チューセッツ工科大学の教授である。この中で利根川氏は「自分は運がよかった、理科系では能力・努力も大切だが、それよりももっと、理科系の研究者は運がよくなければならない」と繰り返し言っている。しかし、この利根川氏の伝記とでもいうべき本をよんで痛感することは、彼のいう「運」というのは、天から、あるいは神からタナボタ式に落ちてきたのではなく、彼自身が「運」が自分にくるように「仕向けている」ということである。利根川氏は京都大学の理学部を卒業して、いきなり米国のサンジエゴ州立大学に留学している。ここに詳述しないが、私自身、昔、この大学に応募したことがあり、「目玉商品」としてマークしていた大学である。このサンジエゴ大学の林多紀という指導教官の紹介で、利根川氏は今度は、すぐ近くのソーク研究所のレナート・ダルベッコに紹介され、ここに勤めることになる。さらに利根川氏はこのダルベッコの紹介で、今度はスイスのパーゼル研究所に移り、ここでノーベル賞受賞の対象となった優れた研究をするのである。

留学の最大の喜びは、利根川氏に対するサンジエゴ大学の林先生のように、まったく無名ではあるが、留学生のことを本気で考え、相談ののってくれる教師に出会うことである。私も海外で多くの「大先生」に会ったが、大先生というのはたいてい忙しくて、日本の一学生などにさく時間を持っていないのが現状である。クラスで出会った、まったく名もない先生、たいした業績もあげてない先生、しかし、自分のことをよく理解して、相談に乗ってくれ、適切なアドバイスをしてくれる先生、このような先生に会えるのが留学の最大の喜びである。これは、「運」と言えば「運」であるが、自分が留学を決意し、その授業を聴講したから得られた「運」である。だから、これは「運」であって、「運」ではない。私は、

『精神と物質』の一読を進める。これは対談形式で話が進められるから、非常に読みやすい。また、日本の大学の閉鎖性、いかに教授たちが自分の研究を「メシのタネ」にはしているが、社会の発展にあまり貢献してないことなどがユーモアを交えて述べられている。

我々は、毎日広大で暮らしていると、そこが唯一絶対の世界のように思えてしまう。単位をどのように上手に取るか。指導教官にどのように褒められるか。どのようにうまく卒業論文を書くか。どのようにいい会社に就職するか。そのような日常的なことがらの中に埋没してしまう。もちろん、これはこれで大切なことである。指導教官に嫌われたら、生活がぎくしゃくし、何となくおもしろくない。対人関係がうまくいかないと、不満だらけの生活になってしまう。しかし、それとでも、日本の中の、広島県の、広島市のたった一つの大学の中だけのことである。「井の中の蛙、大海を知らず」である。現状に不満を持つ者、更に学問研究を発展させたい者、広く海外に目を向けたい者、広大という狭い枠を打ち破りたい者、そのような者すべてに対して広く門戸を解放してくれているのが海外留学である。広大生はもっと海外の大学に留学して自分の可能性を追求すべきである。将来その中から、第2、第3の利根川氏が出てこないと誰が断言できようか。

以上の文章においては、語学力をどのように伸ばし、TOEFLと呼ばれる留学生のための英語試験をどうするか、それから向こうの大学に正規に入学する際の入学試験等の受け方、応募書類の作成の仕方、成績証明書の書き方（広大の発行する成績証明書を直接向こうの大学に送ると、まず合格はおぼつかない）等の具体的なことにはふれなかったが、これは今回の特集においても、他の先生方が言及されると思うので、それらをよく読んで誤りなきを期してほしい。